

# 第 1 回学校教育専門委員会 意見の概要

## 1 第 6 次山形県教育振興計画の骨格（素案）について

- 「『いのち』を大切にし、『生命』を継承していく」ことが、これからの子どもたちにとって、とても大事であり、それをしっかり踏まえた骨格（素案）になっている。  
第 3 節の課題に「5 教振から次の時代に引き継ぐ…」とあり、5 教振のよさを引き継ぎつつ、新たな課題を含め様々な要素を網羅している。今の山形にとって大事な課題に、これからの 10 年間を見据えて向かっていくという内容になっており、計画の骨格（素案）としてはよい出来栄えになっている。
- 6 教振の取組み【イメージ】について、「地域の教育力の向上」と「郷土に誇りを持ち、地域を愛する心の育成」の両項目は密接なつながりがあるため、双方向の矢印で結ぶのが望ましい。また、併せて「キャリア教育・職業教育の充実」についても、同様に地域との関係は深いものがあるため、イメージ上も関連付ける必要がある。
- 6 教振の取組み【イメージ】に、「私立学校の振興」が項目として明確に位置付けられたことは評価できる。
- 「実践の山形」ということも踏まえ、計画の表記としては「継承する」とか「育てる」などの動詞を使って統一するのが望ましい。例えば「心の育成」を「心を育てる」というように。その方がイメージや各論についても、入っていきやすい。

## 2 学校教育分野に係る検討課題について

### (1) 総括的事項

- 「『いのち』を大切にし、『生命』を継承する」、「郷土に誇りを持ち、地域を愛する心の育成」、「豊かな心と健やかな体の育成」の三つの項目は、山形の子どもたちが今持っているよい部分であり、そこを大切に育てていくという意味で、よい枠組みになっている。
- 「継承」や「引き継ぐ」という言葉が出ているが具体的に何を繋いでいくのかということをしかりと考える必要がある。

- ① 幼・小・中・高・特別支援をつなぐ。
- ② 普及・実践の山形の伝統を過去から未来に繋ぎ、新しく何かを創っていく。
- ③ 学びの内容を繋ぐ。
- ④ 社会や地域、自分以外の他者と一人ひとりの子ども達の繋がり。  
繋がり方という面でコミュニケーション能力が必要になってきている。
- ⑤ 学校・地域・家庭という繋がり。

大きい地域であれば小学校という単位で考えるが、小さな市町村であれば中学校の単位という意識を持って連携を考えていかなければならない。高校の数も少なくなる。繋がりが弱まっていくことが予想されるので、そこを具体的に考えていかなければならない。

もう一方で、どう戻ってくるのかということを考えておかなければならない。出て行くだけでは地域がおかしくなる。「繋ぐ」ということは「戻ってくる」という方向性も考えた学校教育の在り方についても考えておく必要がある。

- 6 教振では、連携・つながり・系統性といったことが一番のテーマになるのではないか。

高校卒業の段階で力を付けておくために、中学校卒業の段階ではここまで、そして小学校卒業まではここまでの力を付けるというような、段階に応じた目標づくり（イメージ）が大切である。

インターンシップを実施すると、中学校で既に職場実習を経験している生徒も多く、高校の内容と重複する場合もある。インターンシップを実施するにしても、中学校と高校でのねらいの違いを出さなければならない。それぞれの段階のテーマに応じた流れが重要である。

また、英語の授業についても、小学校で目指す段階、中学校での目標をはっきりしなければならない。

いのちの教育にしても、環境教育にしても、小学校、中学校、高等学校それぞれのテーマを明確にすることが課題である。

- 県では、少子化から予測できる課題に対して、先取りした施策をやっていかなければならない。例えば、統廃合が進み、家に帰ったら遊び友達がいないという状況もある。そういった、子どもたちの居場所を確保するために、例えば学校支援本部を活用するとか、具体的な施策をやっていかないと、5年、10年後はあつという間に来ってしまう。想定できる課題に対してしっかりと施策を打っていけるよう、この計画には期待したい。

## (2) いのちを大切にし、生命を継承する

- 高校を卒業するまでに、将来世の中に出て、自分で家庭を持ち、社会で自立をしていくという気持ちを育てるといった「いのちの教育」をする必要がある。高校に行かない生徒がいることを考えると中学校段階までに、自分が命の継承者であり、自分の命を大事にする、他者の命も大事にする、自分の子どもの命も大事にすることを、学習の中で体験等も入れながら育てていくことが非常に大事になってくる。特に高校の進学校においてもそういった時間をきちんと作る。どの生徒もきちんと学んで卒業することを考えてほしい。

## (3) 豊かな心と健やかな体を育てる

### ① 幼児教育・家庭教育の充実

- 幼稚園では、砂場で遊べない子が増えてきている。手が汚れるのが嫌から始まり、どうやったら砂団子の塊ができるのかと試行錯誤して作るというところまでいくのに非常に時間がかかる。また、幼稚園ではけんかを体験するが、その経験をしないままいくと、どれくらいの言葉を言ったら相手が傷つくのか、どれくらいの強さで叩いたら痛いのかということがわからない。試行錯誤したり、体験したりすることで学ぶべきことが、学べないままとなってしまう。
- 幼稚園ではたくさんの経験をさせるが、それを保護者に伝え、そういう経験をしないと社会人になってから大変だということを伝えていかなければならない。そういうことを保護者に伝えたいが、保護者は子どもが二の次になってしまっている。子育てに十分な時間をとれるような施策が欲しい。
- 小学校の中堅教師の研修に、幼稚園教育を理解する時間がほしい。幼保小連携プログラムも紙で書かれたものと実際の現場を見たのを照らし合わせてほしい。

### ② 読書活動の推進

- 規範意識と読書とは非常に深い関わりがあると過去の研究結果が出ている。読書で新しい価値に触れることができる子どもは規範意識が高く、読書を重ねていくことの有用性がある。

#### (4) 確かな学力を身につけ、高い志をもつ

##### ① 確かな学力の育成

- 小学校の高学年における専科について進めたい。教員が忙しさに追われるという状況の解消につながり、結果的には学力向上につながっていく。
- 複式学級では、1つの学年に先生が教えたら練習問題をさせ、次に別の学年に教えて練習問題をさせる、といった繰り返しを行なっている。子ども同士の考えの交流や知恵の出し合いにより、考えを深めることが必要だが、複式学級では、先生がついていられず、よい意見があっても深めたり、話し合いの軌道修正をしたりできない。複式学級でそういった学力をつけるには加配の手当てが必要となる。
- 今回の学力・学習状況調査の結果について、一人一人の校長がもっと自覚と責任を持って地域・保護者に発信し、ともに新たな学力を育み、子どもたちを指導することが大切だという話し合いが持たれた。

その中で特に小学校だけでなく中学校と密接なつながりを持ちながら、互いの授業内容・指導方法をさらに強化していく必要がある。
- 社会の変化により、知恵・工夫が活かされないと物が売れない時代となっている。これからの社会を生きぬく力を育てるには、グループ学習などで互いが知恵を絞ってレベルの高い課題を解決するような授業が必要。授業をどのように変えていくかということをも6教振の中に盛り込みたい。
- 小・中・高の先生方がそれぞれつなぎの部分連携していくことによって、互いの課題を認識していくことが必要である。

小学校から高校までの流れをきちっと作るとともに、小・中・高の連携もしっかりと考えていかなければならない。

##### ② 時代にふさわしい能力の育成

- 小学校1年生の様子から、非常にコミュニケーション力の不足を感じる。親子の関わりが非常に薄く、教師に愛情を求めてくる子が多い。親と子の関わりについて、家庭教育にどう働きかけていくか課題である。
- 各学校では、縦割り活動で異学年交流を盛んにしている。また、地域に出かけ、地域の方とのコミュニケーションをとることも行われている。一番大事なのは日々行われる授業の中でいかに関わりの時間を持つか、友だちとの関わりの中でコミュニケーション力を高めていくこと。

##### ③ キャリア教育の推進

- 地域の宝である有能な知識と知恵、経験を持ったあらゆる階層の県民、民間企業のOB、教員のOBの方などに参加してもらい、山形県全体で、キャリア教育への取組みを支援するしくみ、組織ができないか。（例えば、山形の宝キャリア教育支援協議会）
- 県外へ進学した生徒に対して、山形県に帰って来てもらえるようにすることはなかなか難しい。しかし、今では、いろんな企業が入ってきているし、先端生命科学研究所ができたことによって、地元出身の大学卒業者であるとか、様々な技術を持った人材が欲しいといったニーズがあるのではないかと。ただ、そういった企業の思いがしっかりと学生に届いていないのではないかと。地元に戻ってくる、あるいは地元を愛する子どもたちを育てるためにも、そこまで考えを広げ、県の施策とも連携させていく必要がある。

## (5) 特別支援教育を充実する

- 6教振では、特別支援教育を一つの項目としてしっかりと取り出し確実に対応するとなっている。平成19年度に特別支援教育ということでスタートして7年目になり、取組みを進める中で新しい課題も出てきている。
- 幼保小中そして高校と全ての連携の中での特別支援教育と考えると、高校教育においてこそもっと取り組んでいく必要がある。高校教育分野の中でも、文言として特別支援教育の取組みを6教振に載せて、連携をもっと深めていければと思う。また、連携を深める部分と高校の中で独自に進めていく部分についても一緒になって頑張っていきたい。
- 幼稚園において、特別な支援を要する子が増えているが、それを認めていただけない保護者が多いので、チーム保育という形で預かっている。療育センター等をお願いする前に、今は教育相談が非常に充実してきているので、それを基に教育相談を受けながら、保護者とともに子どもたちがよりよい教育を受けられるようにしてほしい。
- インクルーシブ教育は、理念はわかるが現実的にどう受けとめればよいのか。国も含めて曖昧な部分があるので、慎重に考えていく必要がある。

## (6) 学校教育を支える基盤を充実・強化する（信頼される学校づくり）

- 現状の学校の先生の負担について考える必要がある。教師が本来力を入れるべきなのは学習指導。ところが、生活指導、家庭・親への対応で時間をとられ、学習指導がなかなか思うようにいかない。人を育てるためには、優秀な人を配置しなければならない。

特に、特別支援教育について、小中のうちに、児童生徒に関わる人がもっといれば、もっと成長を遂げ、高校に入ってからさらなる成長を遂げて社会に出て行っただろうと思う。子どもたちは、どの子も育ちたいと思っている。その育ちたいという信号を的確にとらえてあげることでできる人の配置は教育を考える時に欠かせない。

是非、人を配置することを惜しまず、できるかぎり多く子どもたちにチャンスを与えられる優秀な教員をできる範囲内でいので多く配置してほしい。
- 特別支援教育について、保護者からも人手が不足していることについて厳しい意見が寄せられている。学校現場は職員の定数があり、そして加配をいただきながら教育に携わっているが、なかなか一人ひとりの子どもに丁寧に手を掛けられない状況である。
- 6教振の間に、教員の入れ替わりが相当進む。いろんな分野から優秀な若者に教員を目指してほしい。優秀な教員を育成するためには、教育が若者にとって魅力あるものでなければならない。教育が魅力あるものになるために、学校がその中心となる。
- 均一的な学力向上も大事であるが、子ども達の感性や潜在的な才能をエデュケーションしてあげられるような、教師が子どもと人対人として向き合う機会の創出や位置付けも、教育全体の中で大事なところ。